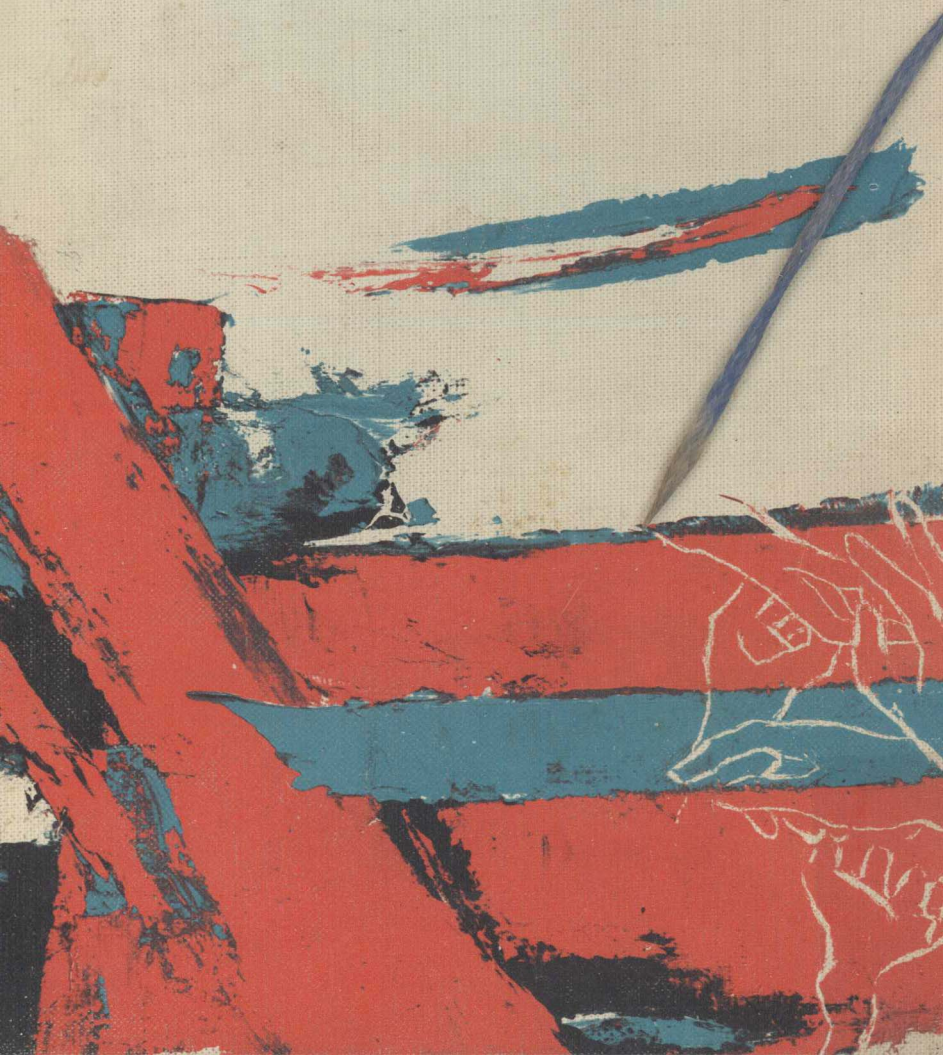
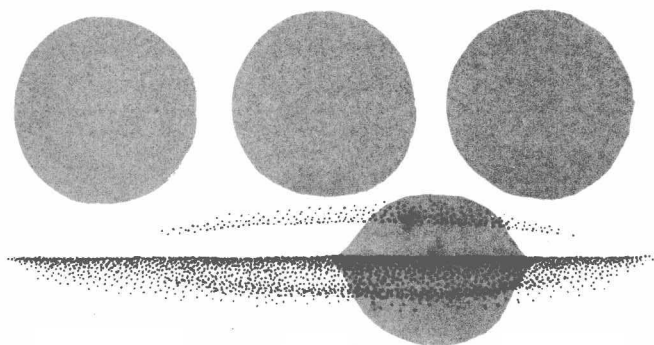


# 希望の砦

竹内泰宏





# 希望の砦

河出・書き下ろし長篇小説叢書 別巻

書き下ろし長篇小説叢書・別巻  
第1回・河出長篇小説賞受賞作

1930年東京に生れる。都立戸山高校を経て1954年  
東京大学経済学部を卒業。1967年第1回河出長篇  
小説賞受賞。著書に『視点と非存在—20世紀文学  
批判』(現代思潮社),『見張り』(「文芸賞作品集」  
河出書房所収),『想像的空間』(せりか書房)があ  
る。現在「新日本文学」「冒険文学会」会員。  
現住所 東京都新宿区下落合2ノ808

希望の砦

発行所 東京都千代田区 神田小川町三の六	泰宏	昭和四十三年十二月十日 昭和四十三年十二月十五日
株式会社 河出書房新社 振替口座(東京)一〇八〇二番	著者 竹内泰宏 発行者 中島隆之 印刷者 川口中央	初版印刷 初版発行 定価八五〇円

装幀者 阪本文男

目次

第一章	船出の償い	3
第二章	葉子の部屋	41
第三章	事故現場	67
第四章	由美子の家	105
第五章	鍵と謎	141
第六章	長い壁・遠い声	171
第七章	台湾独立運動	201

	第八章	法廷にて	259
	第九章	二つの部屋	287
	第十章	地獄篇第五歌	315
	第十一章	『アヴァンチュール』の会	336
	第十二章	続・鍵と謎	381
	第十三章	予感	409
	第十四章	爆発——土地は一枚の皮膚のように	462
	あとがき		515
	河出長篇小説賞・選考委員選後評		516

希望の砦

書き下ろし長篇小説叢書・別巻  
第1回・河出長篇小説賞受賞作

## 第一章 船出の償い

1

顔をあげると、ヒマラヤ杉の葉の先にひらいた赤く火照つた夜空に、病院の建物が金色に縁どりされた影絵のように黒黒と張りついているのが見えた。一本の常夜燈が、皮膚にねばりつくむし暑い蒸気に似た霧を、ぶつぶつと小石の浮きだした地表に浮かびあがらせていた。その光の暈を横ぎって、家族の解剖を終えたばかりの一団が重い足どりで出てきたので、裕二たちがすれちがいに道をあけてやったのは、ついいますしがたのことだ。

びったり閉じた解剖室のドアの奥から、メスのぶつかる音や、男の低くつぶやく声がとぎれとぎれに聞えていた。その音は天井や廊下を這うように、古びた瓦をのせた解剖室の屋根から広い空中に飛びたち、ひとびとの寝静まった病院の敷地の沈黙のうちに吸われていくように思われた。裕二は、かれのいる霊安所の部屋を満たすには弱すぎるその物音のひとつひとつが、何週間か父の生死を包みこんでいた病院の世界の眼に見えない網の目を破り、べつの世界へ運んでいくのを感じていた。

裕二たちがここで待つようになると言われた部屋は、二間つづ

きの六畳の部屋で、その片側はコンクリートの廊下づたいに解剖室の方へつづいていた。なま暖い風を頬に吹きあててくる天窓が病棟の見える入口の反対側にあつて、すっかり暗くなつた藍色の空がのぞいていた。その窓は、塀ごしに表の道路に面していたが、かれが中学生のころ、この病院の塀沿いに通学する友人たちのあいだで、ここが解剖室だという噂がひろまり、ある日塀のわきの電柱にのぼつて、屍体を見る怖さと少年特有のおさえきれない好奇心に戦きながら、こわごわのぞきこんだことのある窓にちがひなかつた。しかしそのときは暗くて、部屋のなかの様子はなにも見えなかつたのだ。

いま、部屋の正面にある白い布のかかつた台の上にろうそくと線香が置いてあるだけの仏壇が、天井の裸電球の投げる黄色っぽい糸の束のような光のなかで、臨終・解剖・退院という奇妙に狂いのない流れ作業のスムーズさをいくらか柔らげ、解剖がすんで遺体がでてくるのを待っている家族の不安定な時間をかすかに救っていた。……親父もついに、ここへ運びこまれたなと裕二は思う。父の幸次郎の入院以来はじまつたあわたましい一カ月間、かれは父の病室へすこしでもはやく行くために、門から塀沿いに急ぎ足で歩き、この解剖室の前を通りぬけて中庭づたいに父の病室へ見舞いにくることが多かつた。そのとき病院の敷地の片隅に、一棟だけ孤立したように建っているこの遺体安置所と解剖室のある木造の建物の前を通りかかるたびに、かれは放心したようにたたずんでいる黒い服を着た中年の男や、紋付姿の老婆や、その



脚もとをうろつきまわっている子供たちの姿を、よく見かけたものだ。そのときは、かれはここが解剖室だということに気がつかなかったのだが、そういえばその古びた木造の建物の横手には、霊柩車だけが入りする、雨ざらしになって木目の浮きだした古い木の門の赤錆びた蝶番ちょうばんと大きな錠前が見えていた。

「終りました」解剖室のドアがひらいて、若い医師の声が聞えた。

コンクリートの床を踏む靴音が聞え、部屋の空気が動いた。つよい薬品の匂いにまじって、線香の香りが鼻をついた。

木綿の白衣を着けた解剖医が、解剖室につづいて廊下の柱のかげから姿を見せた。脂汗をうかべた高い額の下から、読みさしの本のページからあげたばかりのようなつよい視線を投げるその顔は、この一カ月ほどの入院のあいだ裕二の父親を診察した数人の臨床医のうちには見かけたことのない、学者風の顔だった。裕二はすでに父の〈保〉が、臨床医から離れて、病理の医師の手に移っているのをあらためて知った。医師は家族の前になると、いくらかばつのわるそうな微笑を口もとに浮かべた。

「解剖の結果をお知らせします」と医者はずもったカルテに似た紙片を見ながら言った。「死因は肺癌でした」

静かな、断ちきるような口調で解剖医は最後の一言を言った。肺癌というのは、はじめて聞く父の病名だった。父は〈食道癌〉だと言われて入院したが、確証ががらず、入院

の途中からつい二時間ほど前に息をひきとるまで、結核だと言われていたのである。

「六〇〇ccの浸出液があり、胸膜に浸潤していました」

裕二は、肺癌という新しい名称と、さっきまでつづいていた父親の病状とが、まだうまく頭のなかでつながらないのを感じていた。急に調子の変った、言いわけするような、相手の声が聞えていた。

「いろいろこちら側の誤診もあつたわけですから……。食道、大静脈のまわりに大動脈壁をとりまいて癌が圧迫していたので、輸血しても効かなかつたわけです。レントゲン所見では、食道癌的だったので……」

裕二は黙って、講義中の学者に似た相手の一語一語区切りのはつきりした口調を聞いていた。かれはさっきから解剖医の前で、相手の言葉を理解しようとするよりは、むしろそれに反撥したい気持ちに動かされていた。

検査の必要がある、と言われて父の幸次郎が入院したのは一月ほど前だった。ところが数日前に「癌ではない」と医師に言われ、裕二たちは一瞬呆然としながらも安心した直後、突然幸次郎は咯血しはじめた。最初それはなにごと原因の咯血かわからなかったが、やがて検査の結果も合わせて結核であると診断され、同時に、この大病院分院には結核患者をおく病棟はひとつもないから、すぐにこの病院を出てくれるようにと迫られたのだ。それから四五日のあいだ幸次郎の咯血はつづき、転院を何度も催促されながら、結核であると診断されたまま、つい二時間ほど前、息をひきとつたのであつ

た。裕二は、咯血中の、本来なら絶対安静を必要とするだろう患者に、容赦なく退院を要求する病院の態度に憤っても、抗議する余裕もなく、父を収容できる病院を探して歩き、必要な交渉をしつづけていたのだった。

今朝も、定例の一週一度の回診で父を診察した外科の医長は、この病院への入院を斡旋した知りあいの開業医を仲介にして、「咯血もひどいようですから、すぐにも別の病院に移っていた方がいい」という、かなり強硬な言葉を家族に伝えようとしてきた。しかし父の家の近所に住む開業医の谷川医師が自分の患者の往診の時間を割いて夕方病院まで足を運び、見舞いかたがた父の病室にいる裕二たちにその医長の言葉を伝えにきてくれたときには、すでにかれの父は息をひきとっていたのである。

解剖医の抑揚のない言葉が、まだかれの耳もとでつづいていた。

「結核性空洞がいたるところにあつて、結核菌の温床になっていました。癌の原因は、空洞のあとの瘢痕による瘢痕性癌か、または肺に原発したものか、わかりません。今日のは、吐血でなく咯血でした。(決つてるじゃないか！鮮血色をしたあれが胃からでる吐血であるわけがない、と裕二は思う)呼吸器系統の障害が生命とりだったわけです。……癌としては、初期です。老人のため、二段階の手術を考えていたのですが、太い気管支が硬性癌でふさがれていたので、呼吸困難に陥つて、輸血も無駄となり……」

裕二は今日の午後、酸素吸入器をつけたとき、枕になかば

埋めた顔を苦しそうにゆすりながら、吸入器に助けられて呼吸をしていた、死の直前の父の寝顔を思いだしていた。吸入器のマスクを顔にはめるバンドを、インターンをようやくくたえたばかりのような若い助手が慣れない手つきでとりつめたので、患者の頬の皮膚がひきつれ、痛々しく皺が寄っているのを見かねたかれは、医者に一言ことわつてそのバンドをはめ直した。

昼過ぎに、裕二が転院の手続きをするために、はたしてあの容態の病人を転院させるために動かすことができるのだろうかという疑問にとらわれながら、この病室にやってきたとき、患者たちのための炊事場のメッキの光と甘つたるい匂いに満ちた長い廊下を何度もまがって父の病室のドアをひらいたとたん、衝立のむこうの真白なベンキ塗りの壁に囲まれた部屋の中央におかれたベッドの上の父親の顔が、かれの視線をとらえ、異様な印象をあたえた。そばにはこの一カ月間つききりで病人の世話をしている裕二の母の姿が見えたが、カーテンをあげ放つた明るい部屋の中央で、父は枕の上でなかば横向きにねじつた顔を光の射してくる窓の方にむけ、喘ぐように規則正しく肩まで動かして呼吸していた。部屋にはいつてきたかれの方を見ることもせず、窓の外に漠然と投げかけたその眼はかれが見たこともなかった黄色味を帯び、意識があることがわかるだけで虚ろになっており、筋肉の反射も失われたような口のまわりには咯血の際にこびりついた血液の塊りのほかに、黒い影のようなものが漂っていた。見るに耐えられない、なにかが崩れそうな予感が裕二を襲った。か

これは父の死が意外に近くに迫っているのではないかと直観した。《眼が黄色いのは肝臓のせいだとしても……様子が変だ》  
かれは、かたわらで付添いをしてる母に、そのことを注意した。

「さっき麻酔をしたから、そのせいでしょ」

母は夫の吐物をリゾール水の壺に捨てながら言った。彼女は一カ月の患者の世話で、着物の下から小さな身体の骨格が見透せるような気のするほど痩せていた。

「ゆうべはひどくもがいてねえ。夜中にうとうとしていてあたしが気がつくと、そのドアのところに、幽霊みたいに立っているよ」

裕二はいま自分がいって来た、父の足もとの青いドアを見た。幸次郎は二週間ほど前に、胃漏いろうという名の、腸に穴をあけてそこから栄養物を流しこむための手術をしていたが、二三日前から、家に帰ると言いつづけていることは裕二も母から聞いて知っていた。腹にサラシの繻帯を巻き、ゴム管をつけたままの父親が、夜中にドアのところに立っている様子を想像すると、異様な気がした。

「まだここが工場だと思っているのかな……」裕二は一昨日の出来事を思いだして言った。

それはしばらく前から起ったことだった。父は体力の衰弱のためか、ここ数日ほとんど幻覚にとらわれて生きていたようにかれには見えた。一昨日、見舞いに来た裕二の顔を見たときも、かれであることを父親が認めたことはわかったが、すぐに視線をそらし、だれかべつの人間を待っているよう

な、非常に時間が経つのを焦っているような様子を、裕二は感じた。

「だれかを待っているらしいんだよ」母が横から言った。

《芳子のことじゃないのか？》裕二は妹の芳子のことを考えていた。彼女がしばらく前、父の家から不意に出ていったきり帰ってこないという話を、裕二も聞いて知っていた。母も、芳子がこないことの心痛をかくすために、あえてその名を口にしないでのいるのかもしれない。

「この病室を、店か工場だと思っているらしいのよ。いくらここは病院だと言っときかせても、ときどき『あ、そうか』と気がつくようなんだけど、またすぐもとに戻ってしまう……」會計の河西はまだ帰らないか、まだか、まだか」とくり返すのよ。枕もとの輸血のびんを見あげて、これはいくらだ、帳面につけておけて。よっぽどいやだったんだねえ……店が」

裕二は父の枕もとの空中に吊るされた、赤い血液の充満している、目盛りのついた大きなガラスの筒を見た。幸次郎はここ二十数日間、点滴器と呼ばれるガラスの器具から、輸血だけでなく、口から摂取できない栄養もとっていた。すると裕二に、長いあいだ忘れていたかれの学生時代までの環境を浸していた父の家の世界の記憶が、一瞬よみがえった。それは、かれが四五年間離れていたこの老夫婦の周囲に依然としてつきまとっていたばかりでなく、いまとなつてはその一生を浸した世界だったのだ。工科出の父の晩年を苦しめたものが、戦後事業を再開した金庫製造工場の販売店で不慣れた営

業の仕事をするのであったことを思いだし、裕二はかすかな苦痛を感じた。だが、父親が待っているのは、店で父の助手をしていた河西の帰りだけだったろうか。

裕二の父が、母が《店》と呼んでいる金庫の製造会社の販売店に通っていたのは、二年ほど前までだった。戦前は本所にあった沢田製作所の金庫工場では、銀行でつかう大扉や、大小の置金庫を造り、全国の代理店や販売網を使って販売し、戦争中の金庫製造禁止令によって会社を解散するまで事業をつづけていたが、戦後は以前売った工場とは別に小さな工場を借りて事業を再開していた。父は、工場主の長女と結婚したすこし後、大学の工科を卒業してから勤めていた会社をやめ、妻の父親の経営する金庫工場の技師として製造、設計、工場管理をはじめて以来、一生その親族会社に勤めていたのである。かれの母が会社のことを《店》と呼ぶのは、明治の末、工場と住居が同じ場所にあった彼女の子供のころからの習慣だった。

裕二は父の横顔を見た。父が知覚の世界とはなにかかけ離れた暗闇の世界を、夢中で、漂うように生きつづけているように見えた。昨夜ドアのところに幽霊のように立っていたという話をふたたび思いだし、そこから歩いて二十分とかからない、裕二の育った家のことが思いだされた。《人間を、その住まわっている土地へ惹きよせるものは、なんだろう？ 死に近づくとそうなるんだらうか？ それとも……》

「今日は朝から、いくらとめてもわからないで起きあがるんでね、困って先生に言ったら、麻酔を打ってくれたのよ」と

母が言った。

しかし、かれが着いたときすでに打たれていた麻酔から、父は息をひきとる瞬間まで覚めなかったようだ。念のために医務室へ行き、眼の色が変ですが危篤つてわけではないんですか、家族を呼ばないで大丈夫でしょうか、とかれが当直の若い医師に尋ねたとき、「すこしつよい麻酔を打ったためで、心配ないと思います。咯血も、輸血を多量にしてありますから、大丈夫です。あとで回診のとき見てみましょう。家族の方は待機していただく方がいいでしょう」と思ったより楽観的な口ぶりで言っていた病院側も、午後三時ごろ当直医が病室に回診に来たときには、父を一眼見て、顔を緊張させていた。「もし呼ぶ方があったら呼んでください」としばらくして医師は言った。「できるだけやってみます」とつぶやくように言いながら、助手を呼び、酸素吸入、輸血、注射と手をつくしたが、父の呼吸は次第に速くなり、浅くなっ

た。

「カーテンをしめてください」西日がまぶしく輝いているガラス窓を見あげて、やがて医者と言った。職業的にきつぱりしたその口調から、裕二はその医者も父を危篤状態とみなしていることを悟った。しかし死の確実な徴候は医師たちの言葉よりも、父の黒ずんできた顔の皮膚の色や、苦しげな呼吸や、手足の痙攣のうちにあった。

父は痩せて膝頭の骨が大きくとびだしたような感じの脚を、しきりに、非常に不安そうにゆすっていたので、足もとにいた裕二はその膝の上に手をおいた。意外に力のある脚の

骨の重みが裕二の掌にはつきり伝わってきたが、なおよゆうとするので腕に力をこめて抑えながら「大丈夫だよ」と言うと、父はそれきり足を動かさなくなった。裕二はやがてやってきた兄の家族とともに病人の足もとに立ち、その様子を見守っていたが、医者が瞳孔を見るために近づけた顔を、急に眼を見ひらいて父は見あげ、それが家族でも知りあいでもない見知らぬ顔であることを認めたいだらう、落胆したように、ふたたび以前のようによんだ視線を若い医師の顔からそらした。それが、父が他人にむけた視線の最後だった。死が、秘かな物質のように、酸素吸入マスクでなかば蔽われた父の顔の上にその影をのぼし、着物をひらいて瘦せてあばらの浮きだした父の広い胸に聴診器をあてる医者動作や、周囲のひとびとの深刻な沈黙を、機械的な、無意味なものに変え、おき去りにし、父についてなおも期待や猶予状態であったものを、ひとつの屍体そのものへと凝結していった。裕二は肉体につながれながらも、また同時に肉体とは全然別物である父親を長いあいだ感じていたのである。肉体のうちで父を待ちもうけているその死から、あまりにも遠くに自分を感じていた裕二は、いま直面しているものも、一個の肉体の死との格闘でしかないと感じていたのだ。しかし次の瞬間、かれはかれの肉体へ、そして眼の前の人間の肉体の死に打ちかえされた。

突然聴診器を耳からはずした医者が、父の心臓に長い針を一気に刺して急場を救おうとしたが無駄だった。やがて父は呼吸と心臓の動きをとめた。父の意識は永久に消滅し、ベツ

ドの上で動かなくなった屍体と、父の死を見つめている裕二だけが残った。聴診器をふたたびとった医者が、「御臨終です」と職業的に、しかし敬虔さを失わずに言う声が聞え、周囲がまるでながい緊張から解き放たれたようにざわめきだした。裕二は父の上唇がひどく陥没しているのを見かねて枕もとの入歯をとり、意外に柔らかい父の頬の皮膚とひげに触れながら、皮膚の表皮下の毛細血管にはまだ血の通っているように感じられる顎をあげ、口に嵌めてやった。

無効に終わった酸素マスクをはずし、裕二の母や付添い婦が父に最後の着替えをしているとき、病室の天井に装置されたスピーカーが鳴って裕二とかれの兄の名を呼び、二人は廊下の曲り角にある医務室に呼びだされた。事務机をとり囲んでいる二三人の医師のなかの一人の、いましがた父の最後を見とった当番の医師が、若い学者の使い慣れない敬語で言った。

「この病院では、一応そうした習慣になっていますので、御遺体を解剖させて下さい。死因を究明することは、今後のあなた方の御参考にもなると思いますから……」

裕二はこれまでの病院の患者のとりあつかいを考えても、またそれだけが理由ではなく、相手の言葉に正体のわからない抵抗を感じたが、兄と相談して申しいれを受諾し、廊下に出た。

ふたたびドアのひらく気配がして、廊下の先の解剖室の方から話し声が聞えてきた。車輪のついた車に乗せられた棺が

廊下を滑ってくるのが、部屋奥の仏壇ごしに見えた。

「お待たせしました」

短く刈った白髪混りの大男が、汗の滲みだしたランニングシャツ姿を棺のむこう側からあらわして言った。場なれのした物柔かさのうちに、敬虔さを失わない口調だ。それは、さつき解剖室の廊下の壁に手まわしよく積んである上下二級の五六箱の棺のなから、父の使う棺を売った葬儀屋の五十男だった。棺は父の遺体を病室から解剖室まで運んできたときと同じ、白いエナメル塗りの車に乗せられていたが、気がついてみると、車は仏壇のむこう側に棺がおかれたとき仏とおさまるのに、ちょうどよい高さに設計されていた。

裕二は鉋で削られた真新しい白木の棺の表面に浮きでいる木目と、手を切りそうな角をもつびつたりと貼りついている棺桶と蓋の合わせめを見た。それは予想よりはるかに大きく、横たえられた人体を収容するにはこれほどの容積を必要とするのかと一瞬驚くほどだった。父の死が、新しい厳めしい木棺によって裕二たちからへだてられ、もう一度武装したように見えた。しかしそのなかに、解剖台の上におかれるや否やシュニットで一氣に首筋から鼠蹊部にいたるまで切りひらかれるという、あの死後の手術を受けたあとの切り裂かれた父の身体があると考えると、そのなかのつい一時間ほど前までは呼吸していた父の屍体についてこれ以上想像したくないという抵抗感を、かれは感じないわけにいかなかった。

背後から、話しながら部屋に戻ってきた父の主治医の谷川医師と、裕二の兄の声が聞えてきた。谷川は、一人前の医者

になったばかりの一人息子を戦争で失い、七十近い老年になつたいまも開業医をつづけている医師だった。二年前に妻を亡くし、いまは老いた男やめもとして一人で生活をつづけている。齡とつてからの父は、病氣のことはなんでもこの医師に相談することに決め、自分の生命をこの医者にあずけているかに見えた。

「ええ、そう思いますねえ、なにしろちょうど一番悪い季節ですからねえ……明日じゅうには、焼いてしまわないと。できたら、ここでお通夜をすませて、焼いてからお葬式ということにした方が……」

すこし猫背の背中にびつたり貼りついたナイロンのワイシャツを着て、上りかまちに腰かけた白髪の谷川医師が言った。

かれは一二時間前、父の転院をすすめる医長の言葉を伝えるつもりでやってきたのだが、かれの予想とはちがった父の死に出遭つて、親切にもまだ帰らずにいた。すでに職業からくる役割からは離れた者の安らかさが、その口調にはあった。

「葬儀屋は、ドライアイスを十分つめれば大丈夫だ、と言っています……」兄の声だ。

「なにしろこの暑さですからねえ。解剖したりするとよけい……」老医師は、老眼鏡の上から兄を見あげながら、「腐りやすい」という言葉を濁して言った。

「明日は仏滅ですから、お葬式はどうしても明後日でないとね」後からはいつてきた母が言った。

腐爛する……という言葉は、裕二にべつの焦りを感じさせていた。今でも今夜じゅうに、あいつを……芳子をやばなければ、裕二は内心つぶやいていた。それは、これから後に控えているごたごたした様ざまの手續き以上に、重要なことであるように、裕二には思われた。かれ以外の家族は、母も兄も葬儀を前にした忙しさに余裕はないだろう。

「ちよつと……」裕二はしつこい筋をひいて流れはじめた襟首の汗を感じながら、葉子の肩をたたいた。彼女はみなぎっただしさにまぎれて近づかないでいる仏壇の前で、抽出しから線香の束を見つけたし、マッチをすって線香を灯しかけていた。「すぐに帰ってくるから。芳子を探しに行つて……」

「裕二、坊さんを迎えに行つてきてくれないか。平河町の法泉寺、場所知っているだろう？ いま電話をかけてきたから……」一二時間前に勤め先からかけた兄の幸一が、裕二に言った。

「お坊さんは、二人で呼びに行くのがいいんだけどね」と母がつぶやくように言った。

「通夜は、どこでするわけ？」

「やはり家でやりましょうよ。……あんなに帰りがつてたんだから」

「佐山の家はどうする？」

「親戚にはぜんぶ電話をかけたぞ」兄が横から裕二に言った。

「佐山の家も？……」

「ああ全部」兄はわずらわしそうに言い残すと、忙し気に部屋をでていった。

「……わかった。行つてくる」

裕二は低いつぶやくような声で話を交わしている家族と谷川医師の会話を、まるで耳の底をたたく波音のように聞きながら、妻の葉子をうながし、遺体安置室を出た。廊下で裕二は立ちどまった。

かれはポケットから皺になった封筒をとりだしながら葉子に言った。

「きみ、すまないけど芳子のところまで行つてきてくれないかな。昨日話したところ、M 駅のそばだ。ぼくは坊さん呼びに行つて、帰りにもう一カ所、芳子の行きそうなところへ寄ってくるから」

数日前からのいさかいを、父の死が中断している……実際、今日この病院へ葉子があらわれることもないのでないかとさえ、裕二は思っていたのだ。

「あの羽田つて刑事、今夜またくると言っていたけど」葉子が言った。

「いつ？ あれからあとまたきた？」

「先週あの日よ」

「……」今それなら知っている。いいんだ、もう……」裕二は黙ったまま封筒を葉子に渡した。

「そことべつのもう一カ所居そうな場所があるから、そつちはぼくが行く」

「M 駅……遠いわね」と彼女はつぶやいたが、裕二は葉子がひき受けるのを見とどけると、霊安所の建物の外に出た。

気管支や皮膚にねばりつく暑さが、屋外へ出た裕二に襲いかかってきた。気温は、宵の口にはいつてからますます高まってくるように思われた。前方に、人びとの眠っている病院の敷地に建った幾棟もの病棟が、肉体の苦痛と期待と不安を幾つもの壁のなかに閉じこめたまま、暗がりのなかの沈黙を形づくっていた。父の死でとつぜんひらいた時が、その建物から建物へ、そして扉の外の表の街へと視線のように飛翔していった。かれは常夜燈の下を通りぬけ、ヒマラヤ杉の下をいそぎ足で通りぬけた。

かたわらの桐の葉を動かしている風がかれの頬をすぎていくと、急に防腐剤に似たつよい匂いが暗闇から漂ってきた。それは、かれのワイシャツに滲みついた匂いだった。さっき父の身体に近づいたときうつた、カンフルや消毒液の匂いがかれの身体のごくかから匂ってくる……かれの指には、屍体の口をあけて入歯を挿しこんでやったときの意外に柔らかな口のまわりの皮膚と鬚の感触がまだ残っていた。中庭の砂利道が、足もとから行手の闇のなかに静まり返っている二階建の病棟の方へ、小石の影を見せながらつづいている。その道の上を、額の上にガーゼをおき、手引車に乗せられた父の遺体が、はげしくゆすぶられながら、ついさつき看護婦の慣れたすばやい動作で運ばれたのだ。まだ温もりの残っている身体を拭き終えた父の病室のドアがひらかれたとき、周囲の病室のドアは、まるで死者を送る儀式のように廊下に立っていた部屋部屋の看護婦の手で、いっせいに閉じられた。父の病室の向かいの大部屋のドアが閉じるとき、ならんだベッド

の上の患者の一人が、虚ろな、しかし咄嗟に事態をはっきり了解した視線を父の屍体に注ぎ、一瞬後ドアにさえぎられるのを、裕二は見た。

「親父は最後まで、あの病室を事務所だと思って死んだのだろうか？……河西のくるのを待ち、そしてあの土地のことをつぶやいたという親父が、白ペンキで塗られた病院のあのぎしぎしいう鉄のベッドの上で見ていたものは、本当はなんなんだろうか？……あれは妄想にすぎなかったんだろうか？ そうだ、やはりあそこへ電話をかけなければ……由美子のことろへ」

行手の病棟と病棟をつなぐ渡り廊下の途中に明かりが見え、一台の青い公衆電話が見えた。三四人の人が公衆電話の横にならんでいた。薄暗い明かりの下でかれらは漠然とした表情で、通話中の一人の女が話しやめ自分の番がくるのを待っている……。〈だいたい手間がとれそうだな……〉父の入院中の経験で、病人の世話のことや、病状や、転院の交渉などで、この電話機を使うひとびとがひどく時間のかかる通話を知っていた裕二は、べつの場所で電話をかけようと思った。するとかれの網膜に、いま父の棺のそばに見たろうそくの焰の残像がきらめき、何年か前の三枝工業の爆発事故の焰の記憶と重なるのを感じた。裕二はまっすぐに電話機に近づいていって、順番のくるのを待った。

「呼出し音がでているのに、電話はなかなか通じなかった。留守かな？ まだ寝るのにははやい時間だが……」裕二は昔よく知っていた佐山の家の玄関脇の畳廊下で鳴りつづけて



いる電話機を思い浮かべていた。進介がでてくるか、由美子か？……相手はなかなか出てこなかった。あきらめて受話機を耳からはずそうとしたとき、呼出し音がとぎれて、回路のつながる音がした。由美子の声だ。思ったより低い、弾みのある声だった。裕二の声だとわかると、由美子は一瞬黙った。

「いかが、お父さま、その後？」

「……夕方息をひきとりました」

「……………」感に耐えないようなつぶやきが聞えた。

「お通夜は？ お家で？」

「ええ、葬儀はあさってでしょう。お父さんにもそうお伝えしてください……」

「父は、ちょっと風邪ぎみだと言って寝ているわ……たいしたことはないんだけど」

「ともかくおしらせしようと思って。……あの話で、あなたと会いたいんだけど、至急、今夜にでも……あのこと、親父に話そうとしたんだけど……」

言いかけた裕二の言葉を、由美子の声が追いかけてきた。

「裕二さん、あのこと、お父さまにお伝えいただけました？」

「いや……とうとう麻酔が覚めなかったんです、それに、ぼくはあなたがなにを考えているのか、わからない……」

「……………」

「今夜、ちょっとうかがうかもしれません。芳子を探しに新宿へいくんで、『ヴェーユ』って店まで出てきてくれると有難いんだけど。二幸の裏ですぐわかるんですが……」

「初七日までは、ほんとうにたいへんよ、あたしもお手伝いにかがえるといいんだけど」由美子の声が妙にゆがんで響いた。それからしばらく考えていたあと由美子がつぶやくような声が聞えた。「できたらいくわ。たぶんいけると思うけど……」

電話を切った裕二はつぶやいた。《ともかく芳子を探さなくちゃならない、それからだ、由美子のことは……》

病院の扉の外は、ふだんと変らない活気に満ちているように見えた。一台のバスが、病院の門の前の停留所からちょうど発車したところだったが、暗い夜の街を遠ざかっていく満員バスの窓ガラスに張りついた女の肌や色彩の豊かな夏の服装が、かれにいままでいた病院とはちがう世界を思いださせ、かれは自分が幾日前まではそこにいて、いままその世界の空気を吸える人間であることを思いだしていた。だがかれは、この聞きなれた喧騒と父の死によって突然ひらかれた夜のなかで、白ワイシャツを着たまま、糸を絶たれた蜘蛛のように漂っている自分の身体を感じていた。

背後には、闇のなかに輪郭を融かしはじめた、病院の建物があった。あちこちに灯った病室の窓から洩れる明かりが、不定形にならんだきらめく光を空中に漂わせはじめていた。

その建物は、一月間の苦闘のあとで、縁もゆかりもないひとつの公共施設として、かれの背後に遠ざかり、消え去ろうとしていた。かれはちらと、もし痛という《必ず死ぬ》病気でなかったら、おそらく家族はこの病院を憎むだろう、そしてそういう人が、おそらく大勢いるだろう、と思った。そこは